研究

いたら貝の豊漁

―伝承に残る歴史のひとこま―

賛助会員　安部弥右衛門

むかし話といっても、この伝説は事実である。だが惜しいことには、その年代がわからない。明治維新以前であったか、または以後であったか。

板屋貝は、この地方では「いたら貝」といい、常に海底の砂の中にすむ。明治・大正年代にはその殻に竹の柄をつけて、貝杓子と称して、荒物屋の店頭で売っていた。家庭にはなくてはならない台所用品であったが、後になって金属製の杓子が広く用いられるようになり、何時とはなく貝杓子は姿を消してしまった。だから今の若い人たちは、この貝杓子を知らないだろう。

このいたら貝（板屋貝）は、行足類ホタテ貝科で、イタヤ貝というのが本名である。一見帆立貝との識別はむつかしい。そして二枚貝ではあるが、一殻の二枚貝とは甚だしく異なっている点がある。一枚の貝は丸く深く凹み、貝の肢体は全部これに収まり、他の一枚は扁平で蓋の格好をしており、実際に蓋の用をなしている。双方ともその一端に、強い革質のような物質でつながり、常に開閉の役をしている。

一説には、この貝が大群で生息地から他に移動するときは、この蓋を満開し、恰かも帆かけ舟が帆を挙げて海上を走る状態で、水上や水中を風速や潮流を利用して疾走する様は実に壮観であるが、筆者はまだそんなのを見たことがない。しかし、それでホタテ貝と称するという人もある。

私たちの祖父母が働き盛りで元気なある年のこと、それまで一度も中浦湾で獲れたことのないいたら貝（板屋貝）が湾内に異常繁殖して、手繰網や鰯網などで多量に獲れるようになった。

驚いた村の人たちは、急いで手繰網のような変形式で、且つ丈夫な網を作り、貝引漁を始めたところ、とれる、とれる、驚く程とれるので、村中の漁師は皆貝とりに早変りして、毎日出漁した。そして経験をかさねつつ、漁法も追々発明工夫され、改良された。

始めの頃は手操網式の、網の両端に長さ五十尋から百尋（七五m～一五〇m）ぐらいの引縄を一条づつ結びつけて引いていたが、其後に考案されたのは、農夫が田植前に牛馬にひかせるシロカキ用のマンガ（馬鍬－佐伯地方ではモウガと訛って呼ぶ）にヒントを得て、漁師たちは長さ二m余りの角材の四面に十五cm余りの鉄釘を打ちこんだマンガを作り、これを網の両袖の、岩網の端辺りに結びつけたものを使用した。（次のページの図参照）

引網をひくと海底の砂の中からマンガがいたら貝をかき出す。そして多くの貝はそのまま網の中の袋に入ることになるので、収穫量は以前に比べて数倍になった。

このマンガは大正の頃までよく見かけていた。角材の四面に大きな釘を沢山打ち込んであり、それが煤に汚れてまっ黒くなっているのを天井裏にとってあった。

しかし困ったことには、以前とちがってマンガがよく砂に喰いこみ、網に貝が沢山入るので、網の重さが今までの比でなく、そのうえ掌に豆が出来る、右手にも左手にもいくつもできて、中にはつぶれて赤くはれあがる。その痛み

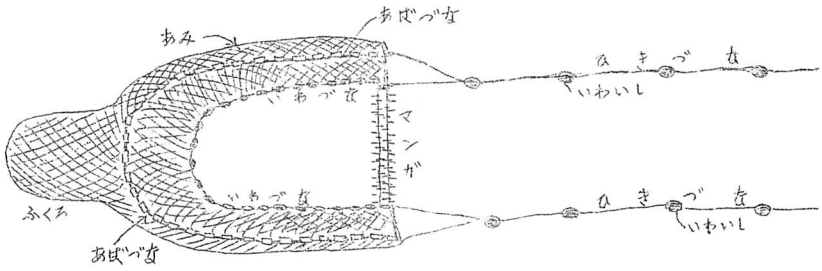
は大変であった。

日の暮れるまで働いて家に帰り、湯き浴びて夕飯を終ると、寝るまでは掌の豆の手当てである。破れた水泡には藁を塗って手当てをし、破れてないのは針をさして中の液を押し出し、焼いた火箸で水泡を熱し、掌の赤くなっている所も火箸で炒熱して手の皮を厚く堅くする。これがまた痛くて苦しかったという。

これが毎晩の仕事であった。

翌朝になれば、暗いうちから起き、仕度をしてめいめいの船に乗りこみ、漁場に向かって我先にと急ぐ。漁場に着くと程よい処に船をとめて、作業開始の合図を待つ。

漁がはじまれば競争である。手の痛いのを我慢して、夕方までくりかえし連続の作業。しかし貝は毎日よくとれた。



村には貝座と呼ぶ貝の処理場があって、沖から積んで帰った貝をここに陸揚げして、大釜に入れて煮上げ、中の実をとり出して莚にひろげて、日光や空気で乾燥する作業が、夜昼つづけられた。この作業はすべて女や子供の仕事であったが、休む間も寝る間もなかったという。

この貝座の経営とか、作業の指揮は誰がしていたか。今では全くわからないが、貝の製品は個人で売買するこ

とを許さず、藩庁がまとめて長崎に送り、支那方面に売りさばいていたのではないかと推測される。ともかくこの貝座は、藩の直営であったか、または藩の御用商人の経営であったか、くわしいことはわからないが、大騒ぎして不眠不休で働いた漁師の収入は、さして多くなかったと聞く。誰か大もうけした人があったに違いない。

もっとも製品としたのは貝の実だけで、多量の殻は捨て場に困ったそうである。明治のころから大正にかけて、作網代部落の西南方、墓地の先の藪の中には、沢山のいたら貝の殻が捨てられてあったが、昭和になって土木工事の関係で、今はもう何物も残っていない。

ところが、このいたら貝の豊漁は何年もつづいてあったものでなく、たった二年だけでその後はほとんどとれなかったようである。それは前にも述べたように、この貝は群をなして大移動したのか、それとも前年あたり種貝が移動して来て住みつき、生息條件がよほどよくて、大繁殖したと考えてよい。漁獲の方も徹底的にやったので、いたら貝の豊漁はその一年限りであった。明治・大正年代、時には網代の砂の中に一、二個発見することもあったが、昭和年代には全く聞いたこともない程、全滅に等しいようである。

このいたら貝の豊漁の年代は、今のところ全くわからない。江戸時代であったか、明治になってからか。またいたら貝のとれた地域も的確にわかっていない。そのころ米水津湾にも大発生して大量にとれ、貝座も出来て製造したというが、それも年代はわからない。

ところが、津久見徳浦で慶応年間イタラ貝の豊漁があったことが、加藤賢成の「豊後全史」に出ているというので、昨年四月大分市に出た序に、大分県立図書館に出

かけ、「豊後全史」をしらべて見た。

「豊後全史」は加藤賢成の明治二十五年十二月の著述で、その下巻稲葉氏の項に

「慶応元年四月、津久見徳浦の漁人、イタラ貝を豊漁し、その数凡そ三十六万あった」と明記されている。

徳浦と中浦、場所はかなり隔ってはいるが、中浦湾での豊漁もあるいはこの慶応元年の四月の頃ではあるまいか。そして、異常発生―盛獲―絶滅といったことになったものであろうか。その辺は謎である。

（おわり）

絵はがきに学ぶ

（その一）―長島川と佐伯湾

用柴　弘

下段に貼付の絵はがきの二景、よくごらん下さい。濃霞山は野岡山の美称であるが、今は樹木が生い茂ってこの市街展望はほとんど叶わないが、叶うとすれば全く隔世の感がするでありましょう。

右下の隅に海運橋が見えます。しかしその上流向って左岸の広大な埋立てには家が一軒もなく、興人への引込線の鉄橋が小さく写っているだけです。鶴谷中学校敷地の埋立ても、まーてや佐伯球場も、その近くの橋もありません。（拡大鏡でごらん下さい。いろいろわかります。）

注目すべきは平野の上の段々畠が、実にくっきりと写っています。営々と耕していまでも作っていたころの写真でしょう。

手前の防備隊の跡の廃墟の様子、その右に復興建築の工場か倉庫の姿が対照的で、歴史的に珍らしい写真です。

終戦後の写真にはまちがいない。そのことは左上の「佐伯湾の風光」の方に（元海軍要港）とあるし、いずれも戦時中はこんな写真は、全く写すことが叶わなかったものです。

（この種絵はがき五種―四〇〇枚づつ二、〇〇〇枚入手、毎号紹介します）

佐伯湾の風光（元海軍要港）

濃霞山より佐伯市街を望む

佐伯名所